

---

# 霧の中を這う者たち

朽木田 印南

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

霧の中を這う者たち

### 【Nコード】

N5106Y

### 【作者名】

朽木田 印南

### 【あらすじ】

産業革命黎明期に突如として世界中に現われた怪物、霧獣。隔壁の都市に追いやられた人類は、霧獣の身体を利用することで別の歴史を歩むこととなる。外燃機関が全ての技術の基盤となる、蒸気の世界へと。

地上を覆う霧、蒸気の都市、齒車人間、ハイブリッド、異形の怪物たち。それらが当然のごとく存在する世界の中、ロンドンに住む孤児の少年カティは、今日も相棒のロイスと共に生きていた。胸に

秘める目的を、いつの日か叶えるために。  
ものを全面改稿いたしました。

以前一度書いた

## プロローグ

十九世紀の頭、産業革命の最中にそれらは現れた。

燃える水から這いだし、その体から霧を生み出す化け物、霧獣。<sup>むじゆう</sup>  
人々は霧獣の驚異に抗うすべを持たず、自らを隔壁に囲まれた都市  
へ追いやることで、霧獣や、その発する霧から逃れた。

人類の栄華は終演を迎え、緩やかな衰退の中で滅亡へと向かうも  
のと思われた。

しかし、霧獣の発生は、新たな時代の黎明をもたらした。大きな  
犠牲と引き替えに、討伐に成功した小型の霧獣。この身体から採取  
された未知の素材が、産声を上げたばかりの工業技術を急成長させ  
た。欧州全土の碩学<sup>せきがく</sup>たちが糾合し、新しい蒸気機関<sup>エンジン</sup>の開発に心血を  
注いだ。

機関技術の発展、人類はその先にこそ、生き残るための希望の光  
明を見たのだ。

そして、その光は今なお追い続けられている。

霧獣の発生から、すでに一世紀と少しが経った。

現在では、霧に覆われた世界には蒸気の都市が点在するまでにな  
っている。

物語の舞台は欧州最大級の蒸気都市、ロンドン

## 第一話

あたりは見渡す限り薄い霧に覆われている。

薄い、とは言っても、普段のそれに比べればという話だ。周囲に目を向けてみても、三フィートほど先からは大きな岩があつたつて気づくことなどできないのは明白だ。

今は、少し前から続いている荒野地帯の中を、蒸気クローラに乗って直進していた。

両脇に無限軌道の付いた小さな車体は、後部の荷台には大量の黒光りする鉱石を、前部の革張りベンチシートには二人の小柄な子供を乗せている。その二人ともが防塵マスクとフード付き外套で身をすっぽり覆っており、容貌は伺えなかつた。

蒸気クローラは騒音を蒔き散らかしながら進む。無限軌道が金属のきしむ音を常時はき出すし、少し大きめの石などが進行方向の邪魔をした時などは、後ろに積載した大量のキノタイトがキンキンガラガラと甲高い音を鳴らして耳をいじめた。

「碩学<sup>せきがく</sup>どもは、どうしてこういうところに気が回らないかねえ。耳が痛くて仕方ないぜ」

車体から生える二本のレバーを操作している子供、カティは一人ごちた、つもりだった。この騒音の中、ましてマスクを被っている自分の独り言など聞こえないだろうと思っていたのだ。

だが、助手席に座った彼の相棒はその声をしっかりと拾っていたようだった。

「そりゃ、設計図の上で全部を片付けちまうからだな」言いつつ、

彼は肩をすくめる。「実際に作ったもんがシミュレート通り動けば、それで完成なんだよ。研究者なんか皆そんなもんさ。きひひひ」

でかく、甲高い声でそう答えるロイス。大量生産品の無骨なマスクを被ったカティとは違い、ロイスは鳥頭の意匠を施したマスクを被っていた。その下から出る声はくぐもって聞き取りにくい、それでも隠し切れようのない幼さが伺える。

ロイスの言葉になるほど、と思う。つまり彼ら碩学とカティとは、この蒸気クローラに求めるものが根本からして違っていたということなのだろう。

ロイスは碩学志望だけあって、そちらの考え方には理解があるようだった。

しかし、そうして造られたモノに命を預けるこちらとしては、堪ったものではない。

今はいい。このエリアには霧獣はいないだろう。なにせ討伐直後のだから。だが、キノ拾いが長期間に渡る際などはその限りではない。可能性は低いが、エリア外から新たな霧獣がやってくるかもしれないからだ。もしそうなれば、騒音が霧獣を呼び寄せることもあるかもしれないし、何よりそんな考えに怯えながら探索などできないはずもない。

それに、霧獣ではなくともヒトに害をなすものはいる。事実、この蒸気クローラの音を頼りに自分たちの跡を付けてきているもの存在を、カティは先ほどからずっと感じ取っていた。

「……ロイス。気づいて……るわけないわな。さつきから尾行されてるぜ。多分ダッドたちだ」

「なんだとお!? あんのくそ野郎、今度は何するつもりだあ!」

車上で立ち上がるうとするロイスを急いで諫める。

「落ち着け、ロイス。あぶねえよ。あと、あんまでかい声出すな。ハイブリッドの匂いがするから、声が聞かれる可能性がある。俺らが気づいてることがばれるかもしれねえ」

ダッドは、一言で言うなら街のゴロツキだ。貧民街の中でも治安のマシなあたりでのみ活動する温い悪党で、カティたちは以前からことあるごとに因縁を付けられてきた。

おそらく、キノ拾いでカティたちがかなり荒稼ぎをしていることを妬んでのことだろう。

「お、おう。わかった。……で、どうすんのさ、カティ？ 前に貧民街でカツアゲされたときみたいに、泣き寝入りすんのはごめんだぜー？」

「わかってる。もちろん、今までの分も仕返ししてやるさ」

今までダッドたちに嫌がらせをされたのは、全て都市の中、しかも昼間だった。いわばアウェーだ。だが今は違う。ここは霧の中で視界が少ない。夜闇と霧はカティの味方だ。

（ただ、少し霧が薄いな）

できれば、一寸先さえ確認できないほどの濃霧が好ましい。傍らの相棒に聞いてみる。

「ロイス、今どのあたりだ？」

ロイスは手元の地図と蒸気クローラに付いた計器を交互に見つつ唸

る。

「うえつとぉー……そろそろ」の4に来るなあ。端っこだよ」  
(……ちよつどいい)

マスクの下で口角をあげる。

おそらく、エリア外に出れば霧が今よりは濃くなるはずだ。そこにおびき寄せて叩く。

霧獣が現われないかが不安要素と言えはそうだが、キノ拾いの探索エリアにはかなり広めに遊びを持たせていたはず。きっと大丈夫だ。

「よし、じゃロイス、今から運轉變われ。んでエリアから出るぞ。

お前がおとりで俺がやる」

「え、ちよ。出るのお？ マジでえ？ 俺、前みたいなのは勘弁だぜ？」

ロイスが少々過剰に驚くが、無理もない。以前、二人で試しにエリア内から出てみたら、本当に霧獣を見かけたことがあったのだ。

その時の霧獣は労働者階級ワーキング・クラスと呼ばれる小型のもので、それでも身の丈二フィートはあった。

その霧獣の素型アーキタイプインセクタが昆虫型であったことが、カティたちの命拾いとなった。獣型マムラなら感覚器代わりに常時放出している霧に捕捉されていただろうし、爬虫類型リプトラはそもそも自前の感覚器がすこぶる鋭い。植物型プランタレなら、それが霧獣だと気づくこともなく捕食されてしまっていただろう。

比較的鈍い昆虫型だったからこそ、気づかれることなく逃げおお



せることができた。

確かに、カティもあの時のことを思い出せば身震いをしてしまう。霧獣とは、それほど圧倒的で、恐ろしい存在だった。カティは絶対捕食者の存在を若くして知った思いだ。

だが、遭遇しなければどうと言うことはない。そう、ロイスに思わせることにする。

「安心しろ、ロイス。霧獣の出す霧も、霧獣自身やキノタイト、黒雨と同じような臭いなんだよ。だから奴らが近くに來たらすぐわかる。そしたらすぐに逃げりゃいいんだ」

自信満々に言う。少々過剰に言わなければ、ロイスは首肯しないだろうから。だが実際は、においだけでは完璧に霧獣の接近に気づくことはできない。それは先の昆虫型の件からもわかりそうなものだが、カティの口ぶりに騙されロイスはそれを鵜呑みにした

「んー、俺はそんなの全然気づかなかったけど……てかキノタイトの臭いってのもよくわかんねーし」荷台から石を取って嗅ぐロイス首を傾げる。「でもまあ、カティならわかるんだろうなあ。……了解。んじゃ、俺はエリア外に出てちよつとしたら、エンジン機関止めてから隠れとくぜ」

「おう、そうしてくれ」

これでダッドに仕返しができると、ほくそ笑む。

いつもはロイスがかんかんに怒るのでそれを押さえる役に徹するのだが、内心ではカティもダッドには相当ぶち切れていた。ロイスに嘘を付いてまでダッドたちに制裁を与えようと考えたのはそのためだ。

(今後俺らに手を出そうだなんて、絶対に思えないようにしてやるぜ)

そうして早速ロイスと席を替わり、準備にいそしむのだった。

ダッドは仲間から、蒸気クローラが急に進行方向を曲げたことを聞いた。

(おっ？ あのガキども、まあた見つけやがったのかあ？)

犬を模した防塵マスクの下で両眉を上げる。彼らは本当によくキノタイトを見つけるのだ。

カテイやダッドが危険だらけの都市郊外にやって来ているのは『キノ拾い』をするためだ。主に、キノタイトと呼ばれる燃料資源を拾い集める。霧獣討伐後のエリアに日雇いで派遣される彼らは、霧獣の死体から採集できるこの鉱石を集めた量だけ歩合制で稼ぎを得られる。

そんな中、正面の蒸気クローラに乗ったカテイとロイスの二人の子供は、どんな手を使ってか他に類を見ない収入を得ていた。現に今も、蒸気クローラの後部にはすでに山のようなキノタイトが積み上げられているはずだ。ダッドにはそれが金の小山に思えた。

(ぜってえアイツら何かキノタイトを集める方法を知ってやがんだ。でないとおかしすぎる)

ダッドは今回のキノ拾い期間である二日間を、カティたちの尾行に費やしてきた。カティたちがいつもどうやってキノタイトを集めているかを調べようとしたのだ。

耳のいい仲間をひとり連れてきて、遠くからずっと彼らの動きを追わせた。

するとどうだろう、あの子供たちは何をするでもなく、まるで始めからそれがどこにあるか知っていたかのように、一直線に霧獣の死骸の元へと向かうのだ。結局ダッドは彼らの動きから不審な点をついぞ発見できず、キノタイトの収集法を知ることではできなかった。

（まあ、わかんねえなら、それはそれでしかたねえ。直接聞くまでよ）

そう考え、マスクの下で汚い笑みを浮かべる。数時間前にそれを決めてから、すぐに今回キノ拾いに参加していた顔見知りたちを呼び集めた。そうして今、新たに集まった三人にはカティたちからキノタイトを奪うとだけ伝えてある。カティらの稼ぎはいつも大人五人分より多いので、皆乗り気で集まった。

肝心の収集法については、一緒にカティたちを尾行していた男と自分だけで独占するつもりだが。

（これがうまくいきゃ、キノ拾いで一財産築くのも夢じゃねえ……！）

ダッドは、今まではカティたちからここまで直接的かつ規模の大きな強奪をしたことはなかった。それというのも、カティたちが貧民街ラムにいたころの保護者がおっかなかったからだ。もし、未だにカティたちがその庇護下にあるのならば、とても手を出す気にはなれない。

だが、カティたちは獲物としては、かなりうまみが詰まっている。諦めるには惜しい。なので、ダッドは今まで少しづつカティたちにちよっかいをかけてはその反応を見ていたのだ。

そしてとうとう、先日ささやかな恐喝を試みたところ、ついぞ報復の類がなかった。このことから、カティたちに手を出せないかも、というのはいらぬ心配だったようだ。と判断したのだ。つまり、すでに彼らはダッドにとってカモなのである。しかも、まるまると肥え太った。

「おい、ジャン。アイツらどこへ向かってるかわかるか？」

仲間に確認を取る。ジャンと呼ばれた男は、耳が毛むくじやうで尖っていた。まるで獣のそれのように。彼は目を閉じて聴覚に集中する。

「ちょっと待て、えっと……。あれ？ あっちはエリア外のはずだがなあ……」

彼が言うには、カティたちはキノ拾いの探索エリアを抜けるようだった。その先にキノタイトがあるとわかっているのなら、ダッドだって迷うことなくエリア外に出るだろう。不思議には思わなかった。それに危険を伴うが、霧が濃くなるのは都合だ。うまくいけば、カティたちにろくな抵抗をさせずにことを成せるだろう。風向きがこっちにやってきた。

「よし、お前ら行くぞ。ガキどもが濃霧に入ったら、一気に襲いかかって気絶させるんだ」

殺さない程度にな、と思いついたように付け加え、ダッドはカテ

私たちの追尾を続けた。

## 第一話（後書き）

興味を持って頂きありがとうございます。

まず、始めにお詫びを。

タグにスチームパンクとありますが、スチームパンクもどきが正確なところです。

はったりです。すみません。

あと、この小説は処女作であり、作者自身手探りのまま進めている状況です。

ですので、

- ・ 誤字、脱字
- ・ 用法違い
- ・ 破綻
- ・ 設定矛盾
- ・ その他、違和感を感じたこと
- ・ もちろん普通の感想も

等々を、感想欄から頂ければ幸いです。

最後に、本作は更新不定期、さらには将来的に大幅改稿の可能性さえあります。

それでもいいという心根の優しい方、よろしければ長い目でお付き合ってください。

11/21 ダッドたちのカティ追跡手段をハイブリッドによるも

の修正。  
以降いくつかそれに伴い修正あり。

## 第二話

キノ拾いの探索エリアから出て少し経つと、次第に地面が茂ってきた。蒸気クローラが地面を踏みしめる音が減るのは、単純にありがたい。そのまま草を踏みしめつつ少し進むと、今度はそこらに木々が見られるようになり、徐々に周囲は森と呼べるものへと変わっていく。

カティはその変化に気づいていたが、この霧の中だ、おそらく口イスには自分がいつの間にか森の中にいたように感じられただろう。

「霧が濃くなってきたな。……ロイス、俺はそろそろ行くから、少し進んだらすぐに機関<sup>エンジン</sup>を切るんだぞ？」

「わかってらー。どうせ木が邪魔すつから、そんな奥まで行けねえよ。それよりカティも気を付けろよ。……ダッドのヤツなんかじゃなくて、近づいてきた霧獣に気づかなかった、なんてことにならないようにって意味だぞ？」

「はいはい」

ロイスの念押しに苦笑する。どうやら昆虫型<sup>インセクタ</sup>の霧獣を生で見たとが、相当恐ろしかったようだった。カティも人のことは言えないが、ロイスほどではないつもりだ。

重ねて言うが、探索エリアはこれでも本来のそれよりかなり小さめに取られている。少々範囲を抜けたところで、よほどのへまか不幸でもない限り霧獣などに出会いようがないのだ。

蒸気クローラから飛び降り、その進行方向から少し脇にそれると、立ち並ぶ木の陰に隠れた。この濃霧の中でダッドたちに見つかるとは思えないが、念のためだ。



そこでカティは防塵マスクをはぎ取り、首にかけた。その下から現われたカティの容貌は、彼の身長相応に幼いものだった。

黒くぼさぼさの長髪、薄い眉、二重のタレ目に金の瞳、筋の通った鼻、等々。全体にこざつぱりとした印象の顔である。しかし異彩を放つのが、両目の下にある青い涙滴型の刺青と、

(多分そろそろ近づいて来たころだろ。……人数は……四、ダッドを入れて五人か)

チロチロと薄い唇から出し入れを続けている先割れ舌だ。カティはこの舌に空気を触れさせ、上顎のあたりにある感覚器官に付着させることで周囲のにおいを感じ取ることができた。この器官は鼻などよりも恐ろしく鋭敏で、視覚以上に周囲の偵察に適している。

カティは、これともう一つ、人間にはない特別な器官センサーを持っていた。

(子供二人に大人五人で来るなんて大人気ないねえー、つとくらあ)

キンセール・クローク  
フード付き外套の中にある腰ベルトに、首にかけていたマスクを改めて固定し直す。ついでに、ベルトからナイフを取り外した。なにも、ダッドたちを殺す気はない。が、子供が本気で大人を脅そうと思うなら、こういうわかりやすい力の象徴は必要だ。

(……しかも一人はハイブリッドかよ。やるならこいつからだな)

ダッドたちの中に異質なおいをひとつ感じ取って、カティは警戒度を上げる。おそらくこいつを倒すまでは、物音に細心の注意が必要だろうと。

(さあてと、ダッドたちは今どこにいる……?)

木の陰から顔を出して目の下の刺青、いや、ぱつと見では刺青に見える、もう一つの感覚器官に集中する。すると、霧で真っ白なはずの視界が変化を見せ始めた。周囲の地形や木々の本数、そして、数ヤード先からこちらに近づいてきている大人たちの位置を正確に感じ取る。

それは、視界の変化と表現はしたが、正確には視覚とは全く違った認識方法による『知覚』だった。

貧民街で住んでいたときに世話になったじいさんは、カティの持つ器官は蛇の身体にあるものと同じだろうと言っていた。おそらく、お前は蛇のハイブリッドなのだろう、と。

それならそれで別に構わなかった。これのおかげで、息苦しくて気持ち悪い貴族の世界からおさらばすることができたし、ロイスにも出会えた。キノ拾いで荒稼ぎもできるし、こうして今、いけすかないダッドの野郎をスコスコにしてやることもできる。

ダッドたちは全く警戒というものをしていない。彼らのおいがそう告げていた。

(近づいてきたな。よおし、来い、来い、来い……)

このまま行けば目の前を通過する。連中のうち、ハイブリッドが目の前を通るまで息を殺す。

(まだまだ。まだ。あと少し。あと半フィート。)

そうして彼らが目の前を通り過ぎ、最後尾のハイブリッドがカティに背中を見せた瞬間、背後から回り込み、一気に近づいた。すぐに獣耳の男が草の擦れる音に気づくが、もう遅い。

その鳩尾に向けて、鞘に収めたままのナイフを力の限り突き込んだ。

「おおらあっ！」

「おぐっ!? じっふお……」

くぐもった声を上げて、膝をつく獣耳の男。だが、まだ悶えている余裕はあるようだ。

「お? 鳥のマスクか? 俺の相棒と同じだな、っと！」

そのマスクの上から顔面に蹴りをたたき込むと、今度こそ男は完全に沈黙した。

「なっ!? 今の声! カティか!？」

今頃気づいたダッドをあざ笑うように、ゆっくりとダッドたちから離脱するカティ。もちろんそれは、足音から位置を気取られることのないように、という意味も持っている。

カティはわめく彼らから四フィートほど離れ、周囲をゆっくり旋回しながら声をかけた。

「おい、ダッド。お前、俺がお前らに気づいてるって、わかってたか? 俺がいつお前らに近づいたか、わかったか? 今、俺がどこにいるか……わかってるか?」

「何だと……っ!?」

ダッドたちからすると寝耳に水だった。こちらから一方的にアプローチできると、信じて疑っていなかった。カティたちが手の届く範囲にまで行ったら、物量をたよりに組み伏せて終わりだと思っていた。だが現状は、ネズミだと思っていた相手に牙を向けられているのだ。

今、男が一人、新たにダッドたちの輪から離れてしまっている。次はこいつだ。その男に徐々に近づく。気づかれない。当然だ。二フィート先さえ見えない霧の中、死角からの接近に気づけようはずもない。

先ほどと同じく、勢いを付けて鳩尾にナイフの鞘を叩き込む。ただ、今度は氣勢を上げることはない。今、それよりも大事なのは、ダッドに恐怖を植え付けることだった。崩れた男をさらに追い打ち、意識を刈り取ったら、またすぐ離脱をする。

「おい、誰かやられたのか!? くそっ! どこにいやがんだ、ガキイツ!!」

「どうなんだ、ダッド? ……いや、OK、わかってる。俺にはその答えがわかってるよ、ダッド。答えはNO、NO、NO! だ。そうなんだろう、ダッド?」

カティの言うとおり、ダッドたちは一切カティを知覚できていなかった。懐から抜き出した棍棒や絞首索ギヤロットを向ける方向さえ、彼らは未だ定められずにいる。

その後も一人、一人と輪から外れたものをカティは昏倒させていった。その間、無駄なおしゃべりはしない。一人はがなり立ててきた。無視。鳩尾に突き込んで、蹴り倒す。一人は情けない声を出して謝ってきた。無視。突いて、蹴る。

結局ものの十数分で、その場に立っているのはカティとダッドの二人だけになっていた。

「く、くそ……てめ、ふ、ふざけやがって。……出てきやがれえ！」

ダッドはすでに声が裏返り、膝をガクガクと震えさせている。息も荒い。落ち着きなく周囲に首を巡らせ、梢の音にすら過敏に反応していた。

というのも、周囲にいた仲間たちが今も生きているのか、ダッドには判別すらできていないのだ。カティだって元貧民街の子供。ダッドからすると殺人など躊躇いなくやってのける可能性も考えられた。

今、彼は自分がカティに殺されるかもしれないという妄想に捕われていた。

「それじゃあダッド、最後の質問だ」

「ひいっ！」

ダッドはもう強がることさえできない様子だった。

カティはゆっくり、ゆっくりとダッドに近づく。気づかれないように慎重に。

そしてダッドの正面に回ると、すぐに離脱できるよう体制を整えてから、さらに近づいた。

「お前、これから自分がどんな目に遭うか、わかるか？」

ダッドからは、誰もいなかったはずの正面に、突如としてカティが現われたように見えた。

その手に握られた、ナイフの冷たい光がダツドの目に映る。

「う、うわああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

よく見れば、そのナイフが血に塗れていないことに気づけたはずだ。だが、ダツドの目は恐怖により曇っていた。すかさず棍棒を振り上げ、カティのいた場所に振り下ろす。しかし、その時にはカティはすでに被害の及びようもないほど遠くにまで離れていた。

（やっべ、やりすぎたかな。……あーあー、いい大人がぎゃあぎゃああと）

正直カティは冗談半分で作っていたので、ここまでダツドが恐慌をきたすのは予想外だった。ダツドが自分を前にして死の可能性に怯えているなどと、思ってもみなかったのだ。

自分の演技に踊らされて、ダツドが馬鹿みたいにビクビクしているのを見るのが愉快だ、その程度の認識だった。散々、煮え湯を飲まされ続けた仕返し。その程度。

（つか、あんまでかい声出すんじゃないやねえよ。万が一、霧獣が来たらどうすんだ）

それが今浮上した新たな問題だった。ダツドのような小悪党への仕返し程度で、霧獣が現われるのは割に合う合わないではない。論外だ。例え、その可能性が低かろうともだ。

まずは彼を落ち着かせて、これ以降カティたちに手を出さないという言質を取る。しかる後、彼も気絶させるのがベストだろう。後は縛り上げて、蒸気クローで引きずって帰ればいい。



これは何も、参加者同士の争いを防ぐための決めごとなどではない。

もっと単純で、切実な理由だ。

霧の中で火薬を燃やすと、霧獣を呼ぶのだ。

次の瞬間、霧に覆われた森中に咆吼が駆け抜けた。

カティが今まで聞いたことのある、どんな獣の発するものとも違うそれ。

霧獣は基本的に、既存の生物と同じ身体の造りをしている。多少の例外はあるにせよ、その基本から大きく外れることはそうそうない。なら、なぜ霧獣の咆吼はこれほどまでにヒトの心を削り、砕き、磨り潰すのか。簡単だ。

今、ダッドの眼前に現われている、その巨体が答えだった。

空から振ってきた霧獣は轟音を響かせながら着地し、一時だけ、周囲の霧を吹き飛ばした。

体長は四フィートほどの、おそらくは中流階級ミドル・クラスだろう。素体は獣型の、巨大で屈強な猿のものだった。握られたこぶしは、丸まったカティ自身よりも一回り大きいくらいはある。

カティは声を上げることができなかった。驚愕と、恐怖によって。ダッドに逃げるの一言を告げることが、どうしてもできない。

そのダッドは目の前の現実が受け入れられないのか、目を剥き、尻餅をついたまま引きつった笑みを浮かべている。手からすでにデ



リンジャーは離れ、股間には大きな染みを作っていた。

猿の霧獣が、今一度あたりの大気を吹き飛ばすような咆吼をあげた。次いで、その身体から真つ白な霧が放出される。機関の気抜きのような音が響き、まるで水槽の水に注がれたフレッシユ・ミルクのように霧が広がると、周囲は先ほどよりもいっそう濃い霧に包み込まれた。

カティは、大猿から霧が放出され始めた瞬間、その場から脱兎のごとく逃げ出していた。

霧獣の身体から直接放出される霧は、やばい。アレは奴らの目鼻の延長、感覚器なのだ。

包まれるどころか、触れられたら最後その霧獣から逃げ切ることにはほぼ不可能だ。

聞きかじりの知識を思い出しつつも、走る速度は落とさない。

一刻も早く、この場から離れたい一心で駆け抜ける。

今にも霧獣が自分に手を伸ばしている、そんな妄想を篩い、走る。

そうして、霧獣がカティの知覚範囲すら外れるだろう距離、ぎりぎりの瞬間。

一度だけ、一度だけ目の下にある感覚器を集中させ、後方の霧獣に意識させてみた。

大猿の右手に捕まれたダッドが、その頭を口内に納められようと

しているところだった。

### 第三話

(ロイス！ どこにいるんだロイス！)

カティは自分の浅慮を呪っていた。

調子に乗って、いたぶるようにダッドの恐怖をあおった結果がこれだ。考え得る限り、最悪のパターンを招いてしまった。おそらくダッドたちはもう、助かりようがないだろう。

あの後、がむしゃらに逃げていた最中に、ロイスを置き去りにしてしまったことに気づいた。

自分が相棒のことを忘れてしまったことにひとしきり愕然とすると、急いで彼の元へと走った。蒸気クローは、霧獣がいるあたりからさらに十五フィートほど奥まった場所にあった。どうやらロイスは意外と奥まで来ていたようだ。

だが、肝心要の当の本人はどこにも見あたらなかった。シートの下にはバクパクが残されたままだったので、おそらくは霧獣の咆吼を耳にしてとっさに逃げ出してしまったのだろう。

(……くそつ。早く落ち着けよ！)

カティは今、大至急で自分の心臓を落ち着かせる必要があった。だが、気持ちとは裏腹に、さっきから胸の早鐘はその速度を落とす気配を一向に見せない。

彼の持つ二つの感覚器官。生物碩学の間ではヤコブソン器官とピット器官と呼称されるそれらは、正常に使えるならば、人の搜索に

はこれ以上ないほどの力を発揮する。

しかし、本来変温動物の身体にあった器官を恒温動物が持った弊害なのか、この二つの感覚器官は、平時よりも心拍数が急激に増えたり、体温が著しく上昇した場合にはその精度を大きく落としてしまふ欠点を持っていた。

「すうー、はあー。すうー、はあー」

深呼吸を何度しても、あまり意味がなかった。

さつきから、最後に感知してしまったダッドの最期が脳裏にちらつく。そのイメージと、今ここにいないロイスが重なるたびに、ロイスの思考は千々に乱れさせられた。

だが、泣き言は言っていられない。せめてロイスを見つけるまでは。

目を閉じ、できるだけダッドのことを考えないように努める。周囲を感じることに集中する。

いくらかの時間が過ぎ、やっとまともに周囲の走査ができそうな域にまでコンディションが戻ってきたことを感じた。すぐに、ロイスを探す。

自分の周囲から徐々に徐々に、その範囲を広げていく。

目の下の器官レリットを使い、周囲の温度を感じると、その輪郭を把握することができた。頭の中に浮かぶのは、全てが透明なモノモテリングで構成された、境界だけが存在する世界。

次いで舌を出し入れし、口内の器官でそれらの臭いを感じ取っては、境界に表面処理テクスチャ・マッピングを施す。透明の世界は模様を付けられ、彩りや、賑やかさ、複雑さを得る。

そうして完成するのは、三次元的に把握された、視覚以上に詳細な自分の周囲全ての情報だ。

どンドン走査の手を伸ばす。本調子に戻ってきた。

蒸気クローラ、バックパック、キノタイト、地面、草、木、草、木、岩、ロイス、木、草……。

(……ん?)

ガバリと目を見開いた。今、ごくごく近くから、意外なほど早く探し人の情報が頭に入ったように思えた。

具体的にいえば、蒸気クローラから十時の方向、四フィートほど先にある岩の陰だ。

それを確かめるため、すぐさま駆ける。

果たしてそこにいたのは、大きな岩に隠れるようにしゃがみ込み、フードを被っている相棒だった。

ぶるぶる震えながら丸まって、耳を塞いでいる。

その情けない姿を見て、思わず安堵のため息が出た。

こんな近くにいたのかと拍子抜けしたが、確かにこの恐がりな少年がそうそう遠くまで逃げ出すとも思えなかった。おおかた、大量に積んだキノタイトの臭いをたどって霧獣が寄ってくるかもしれないと思い、蒸気クローラから離れたのだろう。少し考えればわかることだった。

「……おい、ロイス」

「（ガクガク）」

「おいつつつてんだ！ 耳から手を離せ！」

「うひいっ！」

ガバリと彼の手を剥がすと、すでに防塵マスクを脱いでいたように、彼の非常に情けない表情が見られた。

赤みがかった巻き毛に、ツリ目と、小振りな鼻。

普段なら猫のような顔つきで愛嬌のある笑顔を振りまくのだが、あいにく今は見る影もなかった。顔中を涙と鼻水で汚し、蒼白になった顔を歪ませ、驚愕に両目を見開いている。

そのうち、カティのことを認識したのか、顔をくしゃりと歪ませしがみついてきた。

「……うべえええ、ガディー、こわがったよおおお！」

普段の彼では考えられない力で抱きしめられた。ちょっと引く。

「うげ、汚ねえよ、ロイス。……それにあんまでかい声出すな。……霧獣に気づかれる」

その驚異は、二十フィートほど先に今なおあるのかもしれないのだ。

それを聞いてロイスは再び目をむいた。

「……！ やっぱりさっきの鳴き声、霧獣のだったんだな！？ 多分そうだろうと思ったんだけど、俺、怖くて確認にいけなかったんだ……。カティが死んじゃってたらどうしようとかずっと頭ん中グルグルして……」

そう言っただけ泣きそうになるロイスの頭をぐしぐしと撫で、蒸気クロラの方へ引つ張っていく。ロイスはしつかりしているが、一応カティより一つ歳下だ。自分がしつかりしなければ。

ただ、カティはそう考えつつも、自分自身さつきよりずいぶん落ち着いていることに気づいた。ロイスの無事が確認できたこともあるが、何よりやはり自分自身も一人では心細かったのだらうな、というのが自分で考えてみた末に出たカティの結論だった。

蒸気クロラの脇の地面に座り込み、バックパックからハンケチーフを取り出してロイスの顔を拭う。彼がようやくと落ち着いたのを確認してから、現状を話すことにした。

「すまねえ、ロイス。俺がへマをした。ちょっと脅かしすぎて、ダッドに銃を使わせちゃったんだ。さっきのはそれに釣られてやってきた霧獣だ」

申し訳なさそうに言うカティ。ロイスはそれに憤ってみせる。

「なんだよ、そんなのダッドが悪いんじゃないか！ キノ拾いの最低限のルールも守れないなんて！ それに子供相手に鉛玉放つてくるなんて、なんて情けない野郎だ！」

ロイスが自分を責めなかったことがありがたかった。彼はいつだってカティの味方だった。

と、ひと通りダッドへの罵倒を済ませたロイスがびたり、と止まる。何か考えてるようだ。

「……どうした、ロイス？」

「なあ、カティ。……ダッドたちはどうなったんだ？」

カティの心臓が胸骨を打った。頭にさっきの光景が浮かぶ。顔に出さずにすんだだろうか。

「……あいつらなら、すぐに逃げたよ。お前よりもすげえ逃げ足だったから、多分、今頃野営地ヘイスにまで戻ってんじゃねえのかな？」

嘘をつく。本当のことを言っても、彼をこれ以上怖がらせるだけだと思った。それに、

「そう……だよな。きひひ。んじゃ俺らもとつと逃げなきゃな」

ロイスはこれで、かなり心根が優しいのだ。ダッドの末路を知ったら、例えそれが自分に害を成そうとしていた男でも心を痛めていただろう。彼のそう言う部分は愛すべき性質だった。

ペロリと舌を出して、ロイスの身体から出ている分泌物をすくい取る。彼に嘘はばれていないようだ。そのことに安堵して、話を進めることにした。

「ああ、そうだな。……とりあえず、どうやってここから野営地まで戻るのが問題だ。大きく回り道すれば霧獣に気づかれないかもしれねえけど、そうすると蒸気クローラを持って帰れない」

ここに捨てていくのは無理だ。これは職安からレンタルしている物で、買い取りとなったら莫大な金が吹っ飛ぶ。蒸気クローラを捨てると言うことは、今積んでいるキノタイトも諦めるということになるので、今回の稼ぎもゼロになる。とてもでないが賠償金を支払えないだろう。



「霧獣に蒸気制圧弾スタングレネード使うのはどうなのさ？ そうすれば奴らを無力化できるかもだし、音を察知した齒車人間ギア・マンが討伐に来るんじゃないの？」

キノ拾いに参加する際支給される蒸気制圧弾。確かにこれを使えば、大量の蒸気と大音量によって霧獣を一時的に足止めできる。それに、野営地からすぐさま都市の最大戦力である齒車人間が助けに来てくれるだろう、が。

「無理だ。さつき来た霧獣は中流階級ミドル・クラスだった。こんなちやちい蒸気制圧弾は効かねえ。それに齒車人間はエリア外にいる俺らのことなんざ、助けちゃくれないだろうさ。やつらの頭の固さなら、棒砂糖の束も簡単にへし折れるだろうよ」

「中流階級……」

カティのジョークも無視して、ロイスは顔面蒼白にしていた。無理もない。中流階級の霧獣に鉢合わせて生き残っている人間が、今までどれほどいたのだろうか。

「じゃ、じゃあ、どうする？ どうしようもなくね？」

あわてたロイスがまた情けない顔をする。

確かに打つ手がない、ように思えるが、実はある。手を打たないという手が。

かっこつけたところで、今パツと思いついた考えなのだが。

「そうだな。……たとえば俺が囮になって、そのうちにロイスがこ

いつで森を出るとか……」

「んなのダメに決まってるだろうが！」

言い切る前に怒られてしまった。

「声落とせつて、ロイス」思わず苦笑する。「……ああ、俺も正直イヤだ。あいつの前にもう一度行くなんて、ぞつとしないぜ。だからさ、もうちよっとの間森の中でいよう」

「ん？ ここにいんの？ だって霧獣がいるんだろ？」

「ああ、だからあの霧獣が自分のテリトリーに帰るまで、ここで息を潜めとくんだよ。それを見送ってから、俺たちや悠々と帰らせて貰えばいいさ」

「あ……そうか」

霧獣が恐ろし過ぎて、今すぐにここから離れたかったロイスはそれに気づかなかった。

何が何でも今すぐ森を出る必要はないのだ。

最悪キノ拾いの野営地が解体され、都市行きロンドンの蒸気機関車が出るまでに戻ればいい。

「なんだよカティ、そついやそつじゃねえか。もつたい付けずに最初から言えよお」

途端にロイスの顔に安堵の笑みが乗った。現金なものである。

「まあ、そつ言うつこつた。気長に待とうぜ」

話がまとまったところで息をついた。

無意識にか身体も強ばらせていたようで、ちよつとだるく感じる。そつ言えば昼を抜いているのに、空腹感を全く感じていないこと

に今更ながら気づいた。おそらくいろいろなことがありすぎて、まだ麻痺しているのだろう。代わりに水でも飲むかとバックパックに手を伸ばす。すると、なにやらロイスがそわそわしているのが目に入った。

「どうした、ロイス。盗み食いがばれた時みたいな顔して」

「あ、ああ、うん。そのな、カティ」うねうねするロイス。気持ち悪い。「……………連れション行かね？」

「……………なんだそんなことか」

思い返せばカティも長い時間やっていない。断る理由はなかった。

「はいはい、んじゃー。一緒に行くか。霧獣に愚息を噛みちぎられないか心配なんだよな、ロイス君は」

「んなわけあるか！ 男の付き合いつて奴だよ！」

ロイスの言は適当に聞き流しておいた。

二人してのこのことさつきロイスが隠れていた岩まで行き、そこで並んで用をたす。

用を足しながら弛緩する身体と頭。すると、リラックスしたのを見て取ってか、カティの悪癖とも言える好奇心や命知らずさがひよこと顔を出した。

カティは、頭の中の小悪魔どもが囁く言葉を、深く考えずそのままロイスに提案してみる。

「……………なあ、ロイス。せっかくだしちよつとこの森の奥に行ってみね？」

「……………はあ！？ ……っ、うわ汚ねっ。ひっかかったっ！」

「うわ、ばっちー」

「じゃねーよっ！ アタマ正気か！？ お前さつき生の霧獣見たん

だろ！？ しかも中流階級の！ 普通ここは冒険心発揮すんじゃないくて、岩場の牡蠣みたくおとなしくしとくところだろ！」

いちいちもつともである。

だが、今はさつきとは違い少し心に余裕もできた。ここで引いては男が廢る。

「いやいや、ロイスだって、蒸気クローラの近くにいたら霧獣に見つかるかも、ってんで、この岩の裏に隠れてたんだろ？」そう言つて、彼らに二つの染みを付けられた正面の岩を指さした。「だったら今も離れておくべきだろう？ それに霧獣が帰りに蒸気クローラのアたりを通つて帰るかもしれないしねーしさ。そもそもよく考えりゃ、霧獣からたかが二十フィート離れた場所にいるつても、なんともゾツとしない話だぜ？」

「……ん、んん？ んん？」

適当に思いついたままの説得を並べたてる。ロイスは一見筋が通つてそんな言葉や物量に弱いのだ。実際は、霧獣がいなくなるまで二人だけ森から出ていればいいだけの話なのだが、カティは口にしなかった。

「なつ、ロイス。木にバターでも擦り付けながら歩けば、臭いを辿れるから迷う心配もないし、いいだろ？ なつ？」

「ん、んん。大丈夫、なの、かなあ？」

あと一息だ。

「んじゃ、ロンドンに戻つたら、前々から欲しがつてた蒸気冷蔵庫買ってやるよ。ちっちゃいのだけど。これでどうだ？」

「……っえ！？ マジで？ 行こう行こう、すぐ行こう！！！」

(ふっ、ちよろいぜ)

カティはほくそ笑む。もともと今あるものの容量が足りなく感じていたので、新しい蒸気冷蔵庫を買い足そうと思っていたのだ。実質、カティからの譲歩は無いに等しい。彼に品選びを任せるとやけにスペックにこだわりたがるのが面倒だが、許容範囲だ。

「じゃ、バックパック取ったらさっそく行ってみっか」

「ういっーい！」

こうして、無謀にも二人で森の奥へと進んでみるようになったのだった。

## 第三話（後書き）

11 / 21 カティが森の探索を提案するあたりのやりとりを修正

## 第四話

「よし、準備完了」

と言つても、大きな変化は二人してバックパックを背負つたくらいだ。後は、二人ともブリキ製の水筒を、ロイスはさらに携帯計時器ミタをそれぞれ首から提げている。

「んじゃ、大体野営地ベースに戻るまでの時間も加味したら……二時間くらいだな。それまでうるちよろしてみようぜ。ロイスも、なんか見つけたら教えるよ」

「この霧の中じゃ、俺はほとんど何も見えねえよ……」

ぶつぶつ言いつつも、なんだかんだでロイスは乗り気になってきていた。彼は直接に霧獣をみたわけでもないし、カティほど実感は無いのだろう。それこそちよつとした冒険気分になってきたようだった。

「はい、出発進行ー」

「おーう」

二人は意気揚々と足を踏み出したのだった。

が、一時間も経った頃にはだれていた。

「カァティ〜。……飽きた」

「……みなまで言つな。俺も後悔しつつある」

どこまで行ってもただの森。ただでさえ霧ばかりでもおもしろみがないのに、視界に入ってくるのは木と草ばかりであった。

始めは、足場の悪い中を慎重に進んだり、木にバターを塗りつけたりするのも楽しいように感じていたが、すでに面倒でしかない。どういう訳か、野生動物の一匹すら、カティの走査網センサーに引っつかからないのだ。何か、何でもいいから変化が欲しかった。

「なあ、もうそろそろ一回戻ってみてさ、確認しねえ？ 霧獣も帰ってもおかしくねえよ」

「そう、だなあ。さすがに一時間も経つと大丈夫だよな……」

意地でここまで来たが、正直カティには周囲にはもう何もなさそうだというのは薄々わかっていた。ロイスが可能な範囲より、かなりの広範囲を把握しているのだ。だが、それでも何も無い。これだけ調べて何も無いなら、以後続けて歩いたところで同じだろう。

「よし、一旦戻ってみるか」

そう考えてロイスに首肯し、きびすを返した、その時だった。

(なんだ……これ？ 霧獣？)

口内で感じるにおいの中に、何かが混じった。

それは霧獣やキノタイトのにおいに似ているような気がしたが、何か違う気もする。

身の危険のことも考え、一度集中して調べてみることにした。



「ロイス、ちょっと待ってくれ。何か……いる」  
「んえ？」

「そう、何かがいた。生物だ。」

感覚器センサーを広げてみたら、遠くに生き物の温度を感じた。多少低くはあるが、間違いないだろう。それが、まるで霧獣のような、少し違うようなおいを発しているのだ。

他にも、解せない点が一つ。

(なんだこいつ、小さいぞ？ 下手したら俺らより小さい……?)

そう、その温度反応は霧獣ではあり得ない程、小振りだった。霧獣は最小等級の労働者階級ワーキング・クラスの中で最も小さな個体でも、二フィート程度のサイズが最小の記録だったはずだ。これはその記録より、よほど小さい。

「なんか変なの見つけた。多分生き物……だけどよくわかんね。もしかしたら霧獣の子供かも」

「はあ！？ マジで！？ 超大発見じゃん！？」

霧獣の子供が確認されたという発表はない。見つければ一躍、時の人となれるだろう。

「いや、わかんねーよ。実際に見てみなきゃ。……行ってみるか？」  
「んん、怖いけど、気になるなあ。だってもしそうならすっげえぜ！？ もしかすると霧獣碩学せきがくとしてバーミンガムに招聘されるかも……きひ、きひひひ」

虚空を見てよだれを垂らし出すロイス。しかし、実際そういうこ

ともあるのだろう。恐竜<sup>ドラゴン</sup>の化石を発見した知識人が、碩学都市バーミンガムに招聘されたという記事を新聞<sup>タイムズ</sup>で見た記憶がある。実力さえあれば、正門以外にも門戸は開かれているのだ。

「行こう！ カティ、人は探求心を失ったら、ただの豚だぜ！」

「お、おう」

さっきまでのやる気の無さはどこへやら、カティが若干押される勢いで、その背中を押し始めるロイスだった。

さらに二十フィートほど進むと、気持ち、木々が開けた場所に出た。そのあたりは、カティたちの腿<sup>もも</sup>程度の高さの草が茂っており、それをかき分けるように進むこととなった。

この時点で、すでにカティは相手が霧獣では無いことに気づいていた。もしそうなら、例え相手が子供だったとしてもロイスの手を引いて逃げていただろう。親を呼ばれてはかなわない。

カティはそれよりも別の可能性を考えていた。

このにおい、霧獣に近いように感じていたが、もっと身近なものにも似ていることに気づいたのだ。においが濃すぎて気づかなかつた。とはいえ、都市<sup>ロンドン</sup>から遠く離れた、しかも濃霧に覆われた森の中でその考えはばからしくも思えてしまう。

( だがな……このにおい、それにこの大きさだと…… )

そこまで考えたところで、足を止めた。対象の目の前までやって来たのだ。

おそらく一フィート先の草をかき分けたら、そこにいるだろう。しかし、カティはそれを躊躇していた。目の前の真実が信じられないのだ。

「なんだあ、カティ？ いきなり止まったりして」

「い、いや……ちょっとな……」

そう口にしたが、内心、ちょっとなんて言う心境ではなかった。進むにつれてさっきからの考えが強化されていったが、事ここに至っては疑いようがなかった。すでに自分の両目の下にある感覚器は、一フィート先に横たわっているものの輪郭をくっきりと映し出していた。

これは、こいつは

「なんだよ、カティ。もしかして着いたのか？ よっしゃ！ んじや俺が霧獣の子供、第一発見者だぜえ！」

「おい、ちょ……」

止める間もなく、ロイスがカティの横をすり抜ける。そして、勢いよくその先の草をかき分けた。

「……え？ え？ …………… カティ……………なんだ、これ？」

ロイスがその先にいたものを見て、呆然としていた。カティも、声を出せずにいる。

「……………女の子……………なのか？」

そう、ロイスが言うとおり。そこにいたのは若い女の子だった。カティより四つほど下、十歳に満たない程度の少女が、赤子のように裸で身を丸めている。

ブリチナブロード  
白金色の肩口まで伸びた髪に、白い肌、目鼻立ちの整った顔。泥などで汚れてしまっていたが、それでも損なわれることのない美しさを、幼いながら、すでに有していた。

だが、違う。見るべき箇所はそこではなかった。まず目をやるべきは、その全身の半分以上を覆い尽くしている深緑のうろこ、それに手足の指先から伸びる凶悪なかぎ爪、そして名の由来に恥じず、尾てい骨のあたりから伸びている長い尻尾だろう。今は尾を内側に丸め、先っぽをその両手に捕んでいる。

彼女の持つそれらの特徴は、あることを示していた。

「ああ、ハイブリッドの女の子……だ。多分」

カティはようやくそれだけ口にした。ロイスが首だけで振り返って聞いてくる。

「え、嘘、だってこの子身体が半分以上変異してるぞ？ ……生きてんのか？」

「驚いたことに、生きてるみたいだ。頭が壊されてなきやいいが…」

ハイブリッドというのは、こくひんびょう黒雨病という疾患にかかった者のことだ。

霧獣の体液が混じった黒い雨を浴びて、身体の一部を異形の物に変えられた者たち。

都市の貧民街などでは割と見かけることもあるが、ここまで身体の各所に至って変異がなされた者を見るのは二人とも初めてだった。一体どれだけの時間、黒雨にさらされればこうなるのか。

「ロイス、今回のキノ拾い前、雨どんくらい降った？」

「え、えっと……五日間じゃなかったっけ？」

と言うことは、昨日の間一日を含めて、下手をしたら一週間近くここにこうして放置されていたのかもしれない。ハイブリッドの生命力が人より高いとは言え、さすがにまずいだらう。

屈んで、よく見てみると白い肌はむしろ青白いと言ってもいいレベルだった。小刻みに震えているし、呼吸は浅く、体温もやたらと低い。

見る限り、変異元となった霧獣は爬虫類レプトリ型だらう。平熱がわからないので体温が当てになるのかはわからないが、それでも、現にここぶる体調が悪そうだというのは見て取れた。

助けるつもりなら、すぐにでも介抱すべきだ。だが、カティはその少女の姿を見たまま、遠くを見るように呆としてしまっていた。重なるのだ。彼女の姿が。ハイブリッドになったばかりの頃の自分。それが原因で、離ればなれになった実の妹。黒雨病で死んでいった、貧民街での多くの仲間たち。

頭の中で、それらが駆け巡ってはぐちゃぐちゃになりそうになる。

「なあ……ロイス」

「……なんだよう」

思わず、口を突いて出たのはこんな言葉だった。

「……この子、連れて帰っていいか？」

言ってから、無意識に出た自分の言葉に驚いた。そもそも、この子を無事ロンドンまで連れ帰るのは恐ろしく困難だろう。見なかったことにするのが賢明な判断だった。

だが、傍らの相棒にとって、それは以外でも何でも無かったようだった。

「……はあー、言うと思ったよ。カティ、貧民街でハイブリッドのガキが泣いてたら、いつも拾ってきてたもんな。犬猫じゃねえんだぞっつーの」

そう言って、ロイスはやれやれと肩をすくめるが、カティの顔はまだ晴れない。まだ、ロイスの返事は聞けてないからだ。

そうして、じつと視線を向けるカティに、ロイスは苦笑して言った。

「……オーケイ。わかったよ。連れて帰ろう。……てか、どうせカティはハイブリッド関連のこと、譲った試しねーじゃんかよう」

「……ありがとう、ロイス」

そう言いつつも、いつもカティのわがままを聞いてくれるのだ、彼は。

「それに、俺だってこんなとこに女の子一人ほっていくような薄情もんじゃないあねえつもりさ。立派な碩学になるには、紳士ジェントルマンの素養も必

要だかんね」

カティは自分のフード付き外套を脱いで少女に羽織らせた。

キンセール・クローク

外套を脱いだカティは、長袖の綿シャツと厚手ウステッドのズボン姿になっている。

さらに、彼女に水を飲ませることにする。さつきから全く身じろぎしない彼女を心配に思っていたが、身を起こして水を口元にやればきちんと嚙下したので、きつとまだ大丈夫だろう。

その後、ロイスに手伝って貰いながら彼女を背負うことにした。

長い尻尾が付いているのでかなりの重さを覚悟していたのだが、思ったよりかなり軽い。さらに、全身のうろこから受ける印象とは裏腹に、焼きたての白パンなんて目じゃないほどの柔らかな肢体の感触はカティを驚愕させた。

彼女の鱗は、顔や胴体の前面に関してはほぼ生えて無いと言っていい配置をしていた。おかげでと言うかなんというか、こうして負ぶってみると、外套越しではあるがほぼダイレクトに女性本来の柔らかさをカティに感じさせる。

「カティ、重いのか？ 大丈夫？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

固い動作になったカティを、重さのせいだと思ったのだろう。ロイスの見当違いの心配にも、カティはぎこちない返事を返すので精

一杯だった。

性を意識しただしたばかりの年頃であるカティにとって、相手は幼子とはいえゼロ距離での異性との接触は毒であった。カティはシャイボーイなのだ。

ちなみにロイスはプレイボーイである。童貞もとうの昔に捨てている。

「そおか？ ならいいんだけど……。んじゃ行くっぜ、カティ」  
「そ、そうだな」

木に塗ったバターの匂いを頼りに来た道に戻る。来るときは一時間かけたが、まっすぐ戻ると、少女を背負っていても蒸気クローラのもとまでは三十分で戻ることができた。

着いてすぐ少女を蒸気クローラのベンチシートに寝かせ、やっと人心地が付く。少しかけて気を落ち着けてから、カティは霧獣の確認に意識を向けた。

「どーだ？ 霧獣もついないか？」  
「ちよつと待て」

遠くまで調べようと思うと結構大変なのだ。距離を伸ばすほど得られる情報が爆発的に増えるから、その処理に頭がパンクしそうになる。実際、ハイブリッドになりたての時などは、何度も気が狂いそうになった。

「ん、んー。多分大丈夫だ。もう、この周囲にはいないと思う」  
「そっか。んじやとつとこの森出るかあ。蒸気クローラに乗るっぜ

ー」  
「ああ」



少女の身を起こし、二人で彼女を挟むようにシートに座る。少女はカティに身をもたれ掛けさせ、ロイスの後ろにその長い尻尾を伸ばさせておいた。

今回、運転座席に座っているのはロイスだ。カティはこの森を出るまでは最大範囲で索敵をし続けることになっている。

「んじゃ、命の火を入れますかね」と

ロイスがレバーの横にあるコックをひねる。すると直ちに、蒸気クローラに搭載された機関エンジンから、地の底から響くようなキノタイトの燃烧音が響いてきた。この霧獣から取れる燃料は発熱の速度に関しても、石炭のそれを優に越えているのだ。

「なんかこの音聞くの、すっげえ久しぶりに感じた」  
「だなあ」

この数刻の間で、あまりにも様々なことが起こりすぎた。ロイスの言葉は、なるほどの的を射ているように感じられた。

無限軌道キヤタビラを軋ませて、森の出口へと向かう。

蒸気クローラは至って快調で、燃烧ガスを蒔き散らかしながらぐんぐんとその身体を前へと進ませる。

ロイスもほぼ安全が確約された今、その表情を明るいものにしていった。

だが、カティだけは、霧獣の襲来があつたあたりを通過する際、顔を顰めてしまわないように必死の努力をする必要があつた。悪くなつた顔色だけが、その内心を顕わしている。

「……ん？　なあ、カティ。なんか変な臭いしねえ？　船場地域ドック・エリアみたいというか、肥だめというか……とにかく臭せえ」  
「……そうだな。霧獣のにおいじゃねえか？　多分中流階級ミドル・クラスだったから、ロイスにも感じられるくらいにおいがきつかったんだろうさ」  
「へえー！　こんなのが霧獣のにおいなのか！？　……やっぱ臭せえな。……おえ」

マスクでもしておけと言うカティの言葉に、そうすると素直にうなづくロイス。

この臭い。カティだけはそれがなんなのか早々に理解していた。周囲に漂うにおいては霧獣のものなどではない。

これはダッドたちの死臭だ。ロイスが言った感想は、実のところほぼ正解を言い当てていたと言ってもよかった。大量の血と、糞便と、胃の内容物の混ざったにおい。

カティは、このあたりが濃い霧に覆われていてよかったと心底思った。  
でなければ、真っ赤に染まった地面やそこかしこに転がる肉片が、

ロイスの目に写り込んでしまっていたことだろう。

カティは心の中で、蒸気クロラ速度がもつとあれば良かったのにと愚痴った。

惨劇の現場を越えてしまうと、後は特に何事も無く森を抜け、再びキノ拾いの指定エリアにまで戻ってくる事ができた。ロイスと顔を合わせて笑みを交わし合う。

ただ、あの場で起こった真実。ダッドたちが霧獣に食い散らかされたことをロイスが知ったときの反応を思うと、カティの心は人知

れず重くなるのだった。

## 第五話

周囲の霧は、元の薄めのものへと戻っている。

指定エリア内に戻って少し進むと、地面が水平に均されているあたりを探してロイスは機関エンジンの火を止めた。地響きのような微振動が止むと、後部から最後の気抜き音が高く鳴り、蒸気クローラは完全にその動きを止める。

落ち着いたところで、これからどうするかを二人で改めて決めることとなった。この少女を都市ロンドンに連れて帰るには、普通に野営地ベイスに戻って地下鉄道から、と言うわけにはいかない。

確実に、この少女はカティたちの元から引き剥がされ、何か凄惨な末路を迎える羽目になる。

正規のルートは、使えない。

「カティには考えがあるんだろう？ どうするつもりなんだ？」

棒砂糖をかじりながら聞いてくるロイス。これは支給品ではなく、彼が都市から持ってきたものだ。

「ああ…… つつても、多分ロイスもわかってるんじゃないのか？」

地下鉄道までこの子を直接背負って歩く、後は地下道内を線路沿いに歩いて帰る。多分それしか方法はねえ」

「……だよなあ」

ロイスは苦い顔をしてため息をついた。さもありません、カティが言ったのは簡単なことではない。大人でもそうそうやり遂げられる者はいないだろう。

「ここから都市まで、日数でどのくらいかかるかなあ？」  
「……そうだな。ハプニング無しで進めたとして……地下鉄道まで二日間、そこから都市まではさらに丸一日はかかるだろうな」  
「合計三日か。食料はあるけど、水が足りるかなあ？」

ロイスは心配しているが、カティにはよくわからなかった。

「何言ってるんだ、ロイス？ 二人分の水くらいなら、野営地で大きなボトルをくすねて、それに補給してから行けばなんとかなるだろう？」

「……え、いやいや二人分って。今はまだ目え覚ましてねえけど、今後のことを考えりゃ、さすがにこの子の分もいるだろ、水」

「……ん？」  
「ん？」

なにかおかしかった。会話に齟齬が生まれている。

「え、ロイス、お前付いてくるつもりだったのか？」

「……あ！ カティ！ むしろてめえ一人で行くつもりだったのかよ！？ 無理に決まってるだろ、女の子担いで丸三日間も強行軍とか！ 途中でのたれ死ぬわ！」

つばを飛ばしながら目をむくロイス。彼はそう言うが、カティとしてもこれは苦渋の決断だった。本心を言うなら、ロイスに手伝って貰いたいと思うのは当然だ。

「まあ聞けよ、ロイス。まずお前が正面から帰ってくれないと、この蒸気クローとキノタイトをどうすんだよ？ 苦労して森の中から持ち帰ってきた意味が無くなるだろう？」

「それはっ……そうだけど」

「それにさ、どうせどっちかが先に都市に帰っておいて、ギムじいさんに事の詳細を説明しておかなきゃなんねえ。ハイブリッド関係で俺らが頼りにできるのは、じいさんだけだからな」

「あっ……うん。そう、だな」

カティの言うギムじいさんとは、彼らが貧民街で過ごしていたときの保護者のような人だ。何かと得体の知れない老人だが多方面で頼りになるし、ハイブリッドに差別もしない。

「だろう？ そうすると、俺とロイスのどっちが行く？ って話になるけど、それは、まあ、俺一択だろう。お前に霧の中の一人歩きはできねえ」

そう論すと、とうとうむくれて黙り込んでしまったロイス。しかし、こればかりは譲れなかった。ただでさえ、今日はカティの浅はかさで彼にいらぬ恐怖を感じさせてしまった。

この上さらにわがままに付き合わせるのは、さすがのカティもそろそろ心苦しく感じてきたところだったのだ。

「お前は換金した金でうまい飯でも用意して待っていてくれりゃいいよ。それが一番ありがてえ。俺は多分、五日近くは支給品の固パンとカチカチのチーズで過ごすことになるからさ」

「……わかったよ。そうする」

洩々だがうなずいてくれたロイスに安堵する。だが、この調子では先に都市に戻したところで、ずっとカティのことを心配しているかもしれない。ギムじいさんがうまくフォローしてくれることを願うばかりだった。

「じゃ、まずは野営地まで戻って糧食の補充だな。水をどのくらい持っていればいいのか問題だな……」

「あんま持てないっしょ？ 半ガロンでも結構キツイと思うぜ？」

しゃべりながら、ロイスが再び機関に火を入れようとしたときだった。

二人の間に寝かしていた少女が初めて身じろぎをしたかと思うと、唐突にうなされた。

「う、うとうとう……んんうとうつ！」

飛び跳ねるように少女から身を引く二人。視線の先には、シートの真ん中で身をよじり、苦悶の表情に顔を歪ませる少女の姿がある。

「おっ、おいおいどうしたんだ！？ なんか調子悪そうだぞ！？」

「これは……」

カティには思い当たる節があった。

この浸食度だ。身体には当然カティのように新しい感覚器官が増設されているだろうし、それに併せて脳も一部変異しているだろう。今までは深く衰弱していたせいかその感覚器官の機能も衰えていたが、水分を取って身体を温めたことでそれも戻ってきたのだ。

その予想を裏付けるかのように、彼女は小さな頭を抱え込んで蹲りだした。

「あああああ、いやあああああー！」

ガラス細工が碎けるような悲鳴が上がる。見開かれた目からは、

こぼれ落ちんがばかりの大きな翡翠色の瞳が姿を現す。

今彼女の頭の中には、何かしらの感覚器官が暴走したかのごとく無尽蔵に情報を詰め込んでいるはずだ。このままではまずい。

カティは急いで少女を羽交い締めにする。身体を振り乱し、すごい力で嫌々をする少女を必死に押さえながら叫んだ。

「ロイス！ 俺が押さえてる間に、この子のボタンを全部外してくれ！ 頼む！」

「え！？ あ、ああ！ わかった」

本当はよくわかってなさそうなロイスだったが、それでも暴れる少女に苦戦しながら外套の前止めを全て外してくれた。開かれた外套の隙間から、うるこに覆われていない、少女の白い肢体が露わになる。

「サンキュ！ じゃ、今度はちょっとかわりに押さえててくれ！」

そう言っただけは少女をロイスに押しつけた。いきなりすることにロイスは対応しきれない。

「え、ちょ、押さえてって。いつて！ こら、暴れんな！」

「いやああ！ あああああ！」

今の内と言わんばかりに、カティは上着のシャツをガバリと脱いだ。となりの席で少女と格闘しているロイスは、いきなりのカティの奇行に目を丸くする。

「へ！？ 何脱いじゃってんの！？ 今そんなことしてる場合じゃないでしょ！？」



経験の差か、ロイスはまずふしだらな想像をしたが、カティはそれどころではない。シャツを後ろに投げると同時、ロイスから少女をふんだくって、正面から力強く抱きしめた。

「あああああ！ いやあ！ いやあああああ！」

「落ち着け！ 目を閉じる！」

傍から見ているロイスからすると、今のカティの格好や言動からはそこはかとなく犯罪臭を感じたが、彼の鬼気迫る真剣な顔を見るとふざけて突っ込む気にはなれなかった。

カティの声が届いたのかどうか、少女は目をぎゅっと閉じている。それでも依然もがいている少女を、カティは辛抱強く抱きしめ続けた。

「ほら、落ち着け。……そうだ、大丈夫だから」

「ああ……うつつ……」

いくらかカティがそうしていると、次第に少女は暴れることをやめ、声もか細いものになっていく。しまいには、目元に涙の跡を残すものの、後はさつきと同じように身じろぎ一つしなくなり、すうすうと寝息を立てるまでになった。

場に静寂が戻り、カティの息を吐く音がやけに大きく聞こえたように感じる。

ほっとする。これで無理だったら、何とかして気絶させるくらいしか方法が思い浮かばなかった。その方法ばかり続けていれは、どのみちいずれ無理が出ていただろうことは明白だ。

「お、おい……カティ。大丈夫……じゃない!? お前血だらけじ

「やねーか!？」

「え……あ」

ロイスに言われて初めて自分の腕に痛みを感じるカティ。見ると浅い切り傷がそこかしこにできていた。少女の頭頂部から背中に向けて生えそろうっているうろこに裂かれたのだ。

「待ってる、今包帯出すから!　　ったく、こんなので本当にこれから先持つのかよ……」

ブツブツ言いながらバツバツを漁り出すロイス。

彼は自分の心配をしてくれるが、カティはこの少女が自我を崩壊させずに峠を越えられるかの方がよほど心配だった。

身体の方はきつと大丈夫だろう。ハイブリッドになれば、その浸食度に応じて怪我や病気に強くなる。この子のレベルだと、ちよつとやそつとのことなら正しい処置をするだけで自己治癒するに違いない。

大抵の黒死病による死因は、内臓が人体と互換性の無いものに変わったことでじわじわと死ぬか、頭がやられて廃人化することだ。

後者は、異形の容姿に耐えられない者や、変貌した四肢の感覚が馴染まずに発狂する者など、その理由は様々だ。だが、その中でも感覚器の増設によるものと脳の変異によるもの場合は、ほぼ絶望的だ。大抵死ぬ。

（だが、順応力も高まるから、数日間耐え切れたなら大丈夫……な……はず）

それだけが頼みだった。結局、本人の生きる気力を信じるしかない

いのだ。

「なあ、カティ……。結局なんで素っ裸になって抱きしめたの？」

カティの腕に包帯を巻きながら、ロイスが不思議そうに尋ねてくる。白い布地に浮かぶ赤い染みを見ていたカティの目は、どこか遠くを見るようなそれに変わった。

「……なんつーのかな。いろんな感覚の波に押し流されそうになってもな、どういう訳が人肌の温もりは、こう掴み取れるんだよ。で、それを頼りに戻ってこられるっつーかなんつーか」

「ふうん？」

説明は難しかったが、ロイスは意外とすんなり理解を示す。

「まあ、うん、なんとなくわかるよ。普通に生活しててもさあ？無性に人肌恋しくなるときってあるもんなー。こう、一晩だけでも止まり木が欲しいって言うの？」

「あ、ああ。まあ、うん。わかればいいんだ、うん」

さらりとそう言う話を振られると、カティは対処に困る。

「……で？ 裸同士でカティのことを抱きしめてくれた人って誰なの？ さっきのって体験談ってことでしょ！？ 昔の女!？」

今度は身を乗り出して興奮気味に聞いてくる。せわしないことこの上ないが、ロイスとしては女つ気のないカティのこういふ話は気になって仕方がなかった。

「昔の女、とか言えるほど俺たち歳くつてねーだろ……。それに裸でもねえし……」

もう包帯は巻き終えていたが、ロイスはカティから視線を外さない。その目は、聞くまで離れないと言っていた。

「……妹だよ。いもうと。これで満足か？ だったら俺の上着取ってきてくれよ。話し賃だ」

「ええ〜……なあんだ妹かよ」唇を突き出し、不満を露わにするロイス。「……まあいいんだけど。おもしろくねえの」

口ではそう言いつつも、ロイスはすぐに身を引いた。彼はカティの家庭の事情に関してはあまり突っ込んだことを聞かないスタンスを取っている。この話題は、その決め事に抵触したようだった。蒸気クローラから飛び降りて、カティの上着を取りに行ってくれる。

「……ふう」

なににせよ、新たな不安要素が明るみに出た一幕だ。野営地に戻ってからロイスと別れば、以降は自分だけで今の一連と同じだけの対処をしなければならない。地下鉄道に行くまでの道中では、せめて、はぐれの霧獣に出くわさないことを切に祈るのだった。

野営地に戻ると、カティは人に見つからないよう慎重に倉庫代わりのテントに行った。テントとは言っても骨組みに幌をかぶせただけの簡易的なもののだが。もともといくら食べてもいい安物だ。特別嚴重な管理などしていなかった。

ならなぜ人目を気にしたかというところ、カティは行方不明になってしまったということにするためだ。そのためには、なぜかキノ拾い最終日に食料の補充をしていた、などという理由でもカティやロイスのことが他人に注目されるのは遠慮したかった。

積み残している荷物の陰に隠れて空にしたバックパックに食料を詰め込む。固パンやチーズ、それにニシンの燻製をさらに干した物などばかりだったが、火を通せば少しは柔らかくなるし、何より日持ちがするので文句はなかった。

次に、くすねた水筒に水を入れようと立ち上がったところで、人の気配が接近していることに気づいた。身を固める。

(このにおい……なんだ、ギア・マン歯車人間か)

気づいて身体を弛緩させた。

ゴツゴツと重たい軍靴の音を鳴らしながら、巨体の男がテントにやってきた。

ボウ・ストリート中央警察裁判所の制服を身に纏い、背中に小型化された最新の機関をしょった巨漢の男。厳めしい面貌には、眼球に直接貼り付けるように遠視レンズを埋め込まれている。そのことから、彼が『銃騎士』であることがわかった。都市の誇る蒸気騎士団の狙撃手だ。

おそらく巡回をしているのだろう。遠視レンズから機械音を鳴らしつつ、ゆっくりと移動している。だが、カティは恐れることなく堂々とその眼前に出てきた。

歯車人間は欠片も反応しない。

彼らは上の命令に対し、チップを前にした小間使いよりも従順だ。今はどうせ「蒸気制圧弾の音が聞こえるまでは野営地内を巡回待機」とでもいった命令を、莫迦のように黙々とこなしている最中だろう。歯牙にもかける必要はない。

「おう、おっさん。お疲れ」

カティが失礼な挨拶をしても無視。そのまま歩みを乱すことなく、積まれた糧食の間へと進んで行ってしまった。

それを見送りながら目を細めるカティ。

(……気持ち悪い連中だぜ)

これは歯車人間を見た事のある大抵の人間が抱く感想だ。外面よりも、むしろ内面が機械化されたのではないかと思ってしまう。

(とつとつ水を汲みに行くか)

こんな事をしている場合ではなかった。少女を看っていて貰うため、ロイスは野営地から離れた場所に蒸気クローラを停めて、今もカティを待っていてくれるのだ。

そのことを思い出したカティは、すぐにそのテントを後にした。

第五話（後書き）

11/21 ロイスの食べているものを白パンから棒砂糖に修正

## 第六話

無事、ボトルの中に半ガロンほど水を汲んだカティ。

その後、蒸気クロラのもとに戻った彼の目には、今、正に上半身裸のロイスが映っていた。

彼の正面にいるのは、外套の前止めを全て外されて、あられもない姿になった少女。

「お前……女にだらしがないとは思ってたが、ガキの寝込みを襲うほどに堕ちたか……」

カティは戦慄した。都市ロンドンのぬかるみに侵されて、相棒が内から腐り出していたことに気づくことができなかった自分。そんな自分を心の裡うちで罵倒した。馬鹿野郎、馬鹿野郎。

「……おおい！ 勘違いすんなよ、カティ！ 手遅れな俺を見て後悔してる、みたいな表情で齒がみすんのはやめろよ！ 考えがあったることなんだよ！」

「……申し開きを聞こうじゃあないか」

焦ったロイスが早口でまくし立てた内容を要約するところだった。

今はカティがいない。でも、いつこの少女がまた暴れ出すやもしれない。一旦そうなってしまうと、力のない自分では彼女を押さえつつ上着を脱がすのは無理だ（断言する。事実さつきも力では全く彼女にかなわなかった）。ならどうするか。コペルニクスの転回。先に二人とも、裸になってればいいじゃない。そうすれば、いつでも裸で抱き締めてあげられるじゃない。



何がコペルニクスか。実に、短絡的思考であった。

「お前……本当に碩学<sup>せきがく</sup>志望なのかよ……?」

カティはさつきとは別の意味で戦慄していた。自分の相棒はもう少し利口だと思っていたのだが、と。

「うるせえよ！ 俺は俺で真剣に考えた結果だったの！ てか、だったらカティはどうするつもりなんだよ!? これから何日かは、カティも一人でもうにかすんだぜ!？」

論破、と言わんばかりの表情のロイスだが、カティは即答した。

「んなもん、その子は俺が背負うんだから前止めは外したまんまでいいだろ。俺自身に関してもそうだ。元からお前のフード<sup>キンセール・クロック</sup>付き外套借りるつもりだったから、自分の前止めはすぐ外せるようにしておくよ。そうすりゃ、なんの問題もないだろう」

「あ、なるほどお」

心底感心した様子のロイス。目からうるこだなー、などとつぶやいている。

「……はあ。アホやってないでさっさと上着を着ろよ。んで、俺に外套借してくれ」

「ああ、はいはい」

ロイスは性に関して奔放で、だからこそその発想だったのだろうとはわかる。

ペロリと舌を出して確認してみたのだが、彼は本気でさっきの発

言をしていた。

だが、彼に託された役割は、カティの行方の詐称や、キノ拾いの報酬の受け取り、ギムじいさんへの正確な報告など多岐にわたる。

彼のことは信頼している。大丈夫。大丈夫だ。と思いたい。

いや、大丈夫なのだろうか？ カティは最後にいらぬ不安を抱える嵌めになるのだった。

一通り荷物を整理できたので、そろそろロイスと別れる頃合いだろう。

彼の元に向き直る。

「それじゃあロイス、都市に戻ったらそっちでのことは頼んだぞ」

「おう！ まっかせとけ！ うまいもんいっぱい買い込んで、じいさんとこのガキどもと待つてるからよ！」

「……やめてくれ。俺が帰る前に全部食われちまう……」

彼らにかかれれば山盛りのパーティー・ディナーも五分でペロリだろう。

苦笑しつつ、バックパックを担ぐ。少女を背負う必要があるのだから前にかけることにしたのだが、いやに重い。なんだろうとカティが頭をひねると、傍らのロイスが満面の笑みでその疑問に答えた。

「ああ、カティ。その中に俺が改造した蒸気制圧弾、いくつか入れておいたぜ！ さすがに霧獣がいるかもしれないねえ霧ん中、手ぶらつて訳にもいかねえだろ？」

「……改造つて何やったんだ？」

「そんな疑わしそうな目で見てくんなよ！ 失礼な奴だな。爆発音が鳴らないようにしてあるんだよ。だから正確には蒸気噴出弾、みたいなのかな？ 齒車人間ギア・マンに察知されたらまずいんだし、おあつらえ向きだろ？」

「……へえ」

それは確かにありがたかった。そのことを考えて、蒸気制圧弾は全て置いていこうと考えてたのだから。

「そりゃありがてえけど……そんなのいつの間につつてたんだ？ 初耳だぜ」

聞くと、ロイスはバツの悪そうな顔をして口を開いた。

「……本当はさ、また街中でダッドたちに絡まれたら、そんなときに使おうと思って作ったんだ。そうすりゃ昼間でもカティ、アイツらに負けなかつたら？」

「……そういうことか」

確かに思い返せば、最近のロイスは今までより隣室の発明家の元へ通う回数が増えていたようだった気がした。そんなことをしていたのかと合点がいった。

「あんな事になるんなら、ケチケチせずに探索エリア内でダッドに使えば良かったんだけどさ。そうすりゃ死にそんな目に遭わずにすんだ」

「……そんな顔すんなよ。終わったことだし、それがなきや、この子は今ここにいない」蒸気クロラのシートに横たわる少女を親指で指す。「この子が助かったらさ、それも、まあ全部が巡り巡った結

果つて言えるだろ。な？」  
「……だな。だよな！」

ニカツと笑ったロイスを見て、もう一つ、無事に少女を連れ帰る理由が増えたなと苦笑するのだった。

「じゃあな、カティー！ 無事に帰って来いよー！」  
「おーっ！」

今度こそロイスと別れる。

手は振れないので、声でだけ返事をした。どうせロイスからカティは見えないだろう。カティからはロイスがいつまでたっても手を振っているのを感じることができたが。

ロイスと別れて一時間ほどが経過した。

野営地ベイスから地下鉄道アンダーグラウンドまで続く、道とも言えぬ道に合流した後は、ひたすらそれ沿いに黙々と歩くだけの時間だった。

今のところは休むことなく歩けている。だが、そろそろ息が荒くなってきたのも事実。

そうすれば、さすがに休まざるを得なくなる。感覚器センサーの精度が落ちるからだ。

貧民街で生活するようになって身体を酷使するようになったので体力に自信があったつもりだったカティは、思ったよりも過酷な道

のりになりそうな予感に暗澹とした気持ちになる。

(何にせよ、途中で見かけた街に早く着かなきゃな)

カティはキノ拾いの初日、地下鉄道から野営地に運搬される時、蒸気運搬車トレラのコンテナ内から外の様子を感じていた。都市外の世界を感じることは、キノ拾いに参加する際の密かな楽しみの一つだったのだ。今回は、それが役に立った。

道中にいくつか点在していた廃墟の街。日が暮れるまでにその街にたどり着いて、霧よりも高い建物の上に避難する。これが当面のカティの目標だった。

(大体、今の時点で十六時過ぎあたり……そろそろ見つけらんないやまずいな)

カティの見立てでは、あと一時間もかからぬうちに一つ目の街に入ることができると考えていたが、それでも不安は募る。

イレギュラーはいつでも背後から忍び寄るのだ。現に、今もそうだった。

(……んっ?)

カティは少女の状態に変化が現われたのを、においで感じ取った。

「……っっ、っっっっっっ……!」

つめき声を上げ出す少女。意識を取り戻したようだ。

(……っ! せめて街に入るまではおとなしくしてて欲しかったぜ

！)

今いるのは、とうにキノ拾いの指定地区からは出た場所だ。あまり大きな声を上げられるのは、好ましくない。

「あ、ああああっ」

カティはその場にかがみ込み、少女を地面に降ろした。すぐその場で蹲る彼女を尻目に、バックパックを放りだし、前止めを一気に外す。

「いやああっ！ いやあ………」  
「静かにっ！」

叫びだした彼女を胸に抱え込み、いつかのように力強く抱きしめた。今回は外套があるので腕に傷は付かないが、それでも力強く暴れる彼女を押さええていたら、血が滲むのを感じた。

「目を閉じろっ。できるだけ何も感じないようにするんだっ」  
「あああ……。んんううう………」  
「そうだ……。安心しろ……。大丈夫だ、大丈夫………」

そうして、ぐっと抱き締め続ける。

再び少女が小康状態になったことを確認して、その手を離す。再び意識を手放している少女を見て、後どれだけこの少女がこれに耐えなければならぬのかと、いたたまれなくなった。

だが、気持ち程度ではあるが、さっきよりはマシになっているようにも感じられた。一度目はもっと激しく暴れ回ったし、長く続いたように思う。

(このまま、峠を越えるか、できれば後一回程度の発作で済めばいいんだが……)

何にせよ、再び先を急ぐために準備をする。バツクバツクを引っかけ、苦勞して少女を担ぎ直すと、カティは再び歩を進めだした。

さらに一時間程度歩き、カティは街にたどり着いていた。

周囲はすでに薄暗くなってきつつある。カティは明るさに頼る必要がないが、他に焦る理由があった。それは、夜は霧獣の中でも昆虫型の動きが活発になる時間帯だからだった。昆虫型はカティの覚器と相性が悪い。接近を感知するのは困難だろう。

(ここが……霧よりも高そうだな)

おそらく元は高層共同住宅<sup>アパートメント</sup>だったのであろう、頑丈そうな煉瓦造りの建物を走査する。最上階まで階段が残ってそうなので、今日はここの中で野宿をすることにした。

棒のようになった足にむち打って、五階建ての階段を一段一段上がっていく。四階から五回にかけての階段を上がる時などは、すでに必死の形相で、顎から汗を何滴もしたたらせていた。すでにここまで来ると、覚器の精度云々よりも、早く休みたい一心だった。

「……ふはあー！ やつとここまで来れたぜえ〜」

五階まで上りきった達成感でそのまま倒れそうになるが、踏みと

どまる。少女を先に降ろさなければ。

ゆっくりと彼女を起こさないように降ろした後で、バックパックを放り出し、今度こそカティはその身を床に投げ出した。

視界に写る高い天井は、人がいなくなつてからの年月ほどには老朽化が感じられない。むしろ、貧民街にいた頃のカティの住み処よりも上等だろう。さすがにこれは経年劣化でボロボロになっているが、カティの周囲には元の住人が使っていたであろう家具類もそのまま放置されていた。皆が着の身着のまままで避難するほど、当時は説破詰まった状況だったのか。

「……………水飲みてえ」

喉の渴きを覚えたカティはその身を起こし、バックパックの方へ這いずっていく。そこで、横たわった少女の外套がはだけていることに気づいて、慌てて前を合わせてやった。

「はあ……………意識をはつきりと取り戻してくれりゃいいんだけど……………」

つぶやき、取り出した小さめの水筒から水を飲む。

少女にも飲ませてやろうと近づいたところで、カティはそれに気づいた。

「なんだ……………よく見たら足がだいぶ人間と違うな……………」

極力少女の身体から視線を逸らせるようにしていたので、今まで気づかなかつた。彼女は尻尾だけではなく、その足も黒雨の影響で大きく変異させているようだった。



腿のあたりまでは、うろここそ生えているものの女性的なラインを残している。しかし、人のすねに当たる部分が大きく反り返っているし、甲に当たる部分がいやに大きい。見るだに強靱そうな造りだ。それに指も一本一本が太く力強そうだし、その親指のかぎ爪はひとときわ大きいものが付いていた。

「こええ………こんなので引つかかれたら、即死するんじゃないのか………?」

つんつんと爪をつつきながらそうつぶやく。それほどの暴虐性を、その爪から感じ取ることができた。内包する威圧感が、カティの持つナイフなんかとは全然違った。これは、狩るものの持つ武器だ。

そこから視線を上げていったところで、見てはいけないものを見たような気がして、カティはすぐに目を伏せる。自分は何も見えない。そう言い聞かせる。

「よ、よし。それじゃあ、水でも飲ませるか！」

誰も聞いていないのに、大きな声を上げるカティ。顔は真っ赤だ。

少女の身を起こしてやりつつ、水筒から水を飲ませる。

「やっぱり、さっきよりはスムーズに飲むな……。そう言えば、気絶してるのに、飯はどうやって食べさせりゃいいんだ？」

食べさせなくても、保つことは保つ。事実おそらく彼女はすでに五日近くは食事を口にしていないだろう。それでも水を与えただけでこの回復力だ。

だが、それは食事を与えられれば、もっと回復の力添えになるだ

ろつ事も意味する。できれば、何か食べ物を与えたい。

「んんん……鍋でもありゃパンを水で煮えたんだが……ミスったなあ。小さいのでもくすねてきとけば良かったぜ」

火にあぶっただけの固い食品は、さすがに無意識で食べることはできないだろう。

「しかたねえ……なんか探しに行くか」

家具がこれだけそのまま残されているのだ。鍋の一つや二つあってもおかしくない。そう考えたカティは別の部屋へと家捜しに行くことにした。

一応少女の頭元に水と、固パンを一つおいて他の部屋へと向かう。おそらくは一般的な労働者が一緒に住まう共同住宅だったのだろう。部屋の中には幾つもの朽ちたベッドや、椅子、割れた食器の破片などが転がっていた。

「さて、肝心の鍋は……と。……ダメか」

目に入った共同の台所にて鍋を探したが、どれもすでにボロボロだった。湿度の高いこの地域で何十年も放置されていたのだ。当然と言えば当然である。

「こりゃ、期待薄だな……」

そうは思いつつ、諦めるわけにもいかない。

しびしび、疲れた身体に叱咤し、階下へと下っていくのだった。

## 第六話（後書き）

書きため分終了です。以降、更新頻度にはらつきが出ます。

## 第七話

結局、予想通り使用に耐えうる鍋類は一つも見つかることがなかった。

「あゝ、だる。……仕方ない、普通に固パンを水に浸してから食わせるか、水筒一個犠牲にするか……。ていうか最初からそうすりゃ良かったか……」

首から提げたロイスの携帯計時器クロノミタで時間を確認する。

(十八時過ぎ……か。そーいやとつくに外は真っ暗だもんな……)

吹きさらしの窓から外を見ても、目には何も映らない。どこまでも続く一面の闇だ。

(これが昔なら、『月明かり』なんてのがあつたりしたのかな?)

今は暗くて何も見えないが、どうせ日中でもそれは変わらないことなのだ。

今のように霧よりも高い位置から見渡したところで、視界に移るのはつまらない世界だけだろう。白い地面のように敷き詰められた霧と、所々から頭を出す高層建築の上部、そして空を一面覆い尽くしている排煙混じりの灰色の天井だ。

変化に乏しい、色彩を欠いた、そしてどこまでも続く世界だ。例えこの廃墟の街から出て、建物が大木や小山に変わっても、それは変わらない。人のいない世界は、そうそう姿を変えたりはしない。それがいいことなのか、そうでないのかは、カティにはわからない。

もう一度のろのろと五階に向けて足を持ち上げていたカティは、四階への階段途中でそれに気づいた。

(……あの子がない!?)

確かにさっき寝かしておいたはずの場所に、気配が無くなっていた。

可能性は二つ、起きたか、カティの気づかないうちに小型の霧獣に襲われたかだ。

どちらにせよすることは一つ。感覚を延ばす。

(……なんだ、いるじゃねえか。……起きたのか?)

すぐに部屋の端に蹲っている少女を発見する。頭痛に耐えきれずそこまで転げていったのかとも思ったが、叫び声などは聞こえなかった。

(まさか……)

疲れを無視して五階まで駆け上がる。

そこで確認することができたのは、部屋の端で蹲る少女。着せられていたフード付き外套の襟元を掴み、自身をかき抱く格好をしている。がたがたと震えていた彼女は、駆け込んできたカティの足音を聞き撥ねるようにして驚いた。

「峠を越えたのか……?」「つぶやくカティ。「おい、頭痛はもう大丈夫なのか?」というか、言葉はわかるか?」

彼女に聞いた後で、言葉はわかるかと言う質問の無意味さに気づき、苦笑する。なんと聞くべきかと考えあぐねながら近づいてみると、少女は横座りになったまま、這いずるように後じさった。

「ひ、ひう……」

か細い声が聞こえたが、アレは悲鳴の類だろう。少しショックを受けるカティ。

「お、おい。怯えるなよ。何も悪いこたしねえよ」

と、悪人御用達の台詞を吐いたところで、少女が安心するはずもない。

イヤイヤと首を振りながら、壁沿いに横へと尻をじりじり逃げていく。

（そこまで怖がらんくても……俺や犯罪者か。……ん？）

さらに近づこうとしたところで、少女の顔がカティの顔を正確に見ていることに気づいた。あたりはどこまでも続く真っ暗闇だ。目だけではカティの位置を把握することすら困難なはず。

（コイツ、もしかして無意識に感覚器センサーを使っちゃってんのか？ だとしたら……）

カティの脳裏に浮いた危惧は、すぐに目の前に現われる。

少女の顔が歪む。

「ひ……いや、来ないで。いや、いや。あ、ああ、ああああっ！」  
「くっそ！ やっぱか！」

かろうじて静まっていた感覚器官だが、暗闇の中のカティを知覚するがため無理に使われ、再び制御不能になったのだ。

すぐ彼女に駆け寄ったカティは、自分の外套をはだけて力一杯抱きしめた。

「落ち着け！ 目の前の俺にだけ集中しろ！ 周りを見る必要はない！」

「あううううう！ ううううううう！」

なおも暴れる少女の頭を自分の胸に押しつけるようにする。後頭部や首筋のうろこが手の平を裂くが、気にしてはいられなかった。

「大丈夫だ！ お前は大丈夫だから！ 俺が守ってやるから、心配するな！ 何も怖くない！」

「う、うううう。ううううう……」

やっと収まりだした。腕の中で荒く息を吐く少女をあやしなから囁く。

「そっだ……怖がるこたねえよ……安心しろ……」

そうして少しの間彼女の後頭部をぼんぼんし続ける。

少しの間そうし続けると、彼女の動きが無くなった。また寝たかとかティは思ったが、どうやらそうではなく、ただじっとしているだけのようだった。

「もう、大丈夫か？」

「……………うん」

返事が返ってきた。それだけのことに多少の感慨深さを覚えつつも、彼女から身を離す。

「……………あ」

すると少女が心細そうな声を出す。今にも、再び感覚器を使い出しそうだ。さつきとは反対の理由でというのは嬉しいが、カティは慌てて彼女に言う。

「ああ、心配すんなって。どっかに行ったりしねえよ。ちょっと明かりをつけるんだ。お前もその方がいいだろ？」

「……………うん」

(とつととした方が良さそうだ)

小走りでバツクパツクに近づき、そこから幻燈器げんととうきを取り出す。横蓋を二カ所開き、くすねてきた小さなキノタイトを一つずつ放り込み、片方に黄燐ルシファマッチで火をつける。両方の蓋を閉め少し待つと都市ガスが魚尾噴出し始めるので、そこに再び黄燐マッチで火をつける。すると、蒼い光がフレームの中でふわりと上がり、室内を優しく照らし出した。

ついでに水筒を手に取り、少女の元へと戻る。

「……………きれい」

「なんだ、お前。幻燈器使ったこと無いのか。この青いの触んなよ。あちーからな」



「うん」

少女の前に幻燈器を置き、彼女のとなりにカティも腰掛けた。

彼女は光や、それに照らされた室内をきよるきよると見ている。

初めて見る苦悶以外の彼女の容貌は、やはりというか、幼いながらに美しいものだった。

翡翠色の瞳が蒼い光を受けて、軌跡を残すように暗闇の中で煌めく。今はところどころ汚れでくすんではいるが、ブラチナフロント白金色の頭髮も時おり持ち前の艶やかさを覗かせる。何より、身体の至る箇所に見られる深緑のうろこが妖しく輝き、まるで彼女を彩る碧晶石エメラルドのようであった。

そうして少女のことを改めて観察していると、視線をさまよわせていた彼女と目があった。

一瞬お互いに静止する。

「……………ほら、これ飲め」

ばつの悪さをごまかすように、持ってきた水筒を手渡す。

「……………ありがとう」

そう言って少女が水筒に手を伸ばしたとき、ぴたりとその手が止まった。

「……………？ どうした？」

少女は動かない。その視線は、自分自身の手縫い付けられてい

た。

(あ、こいつもしかして、自分の変化に気づいて無かったのか?)

内面が変化していたことには、さすがに気づいていただろう。だが、恐らく見た目が様変わりしていることには、今気づいたのだ。

カティは彼女が取り乱すかと思いき身構える、が。

「私……黒雨を浴びたん……ですね」

(……お?)

予想を裏切ってそんな言葉が出てきた。引つ込めた手を眼前に掲げ、ぐつぱぐつぱしながら裏表を確認している。唇は震え、悲しそうな目になっているが、カティの目には彼女は何とか平静を保っているようには見えた。

「……ああ、俺が見つけたときにはもう、そうだった」

「そう、ですか」

ぼつりとつぶやき、きゅっと唇を噛み、視線を少し落とす。確かに落ち込みはしたようだが、それ以上の反応を見せない。

カティは、そんな彼女に驚きを隠せなかった。普通見た目が大きく変われば、恐慌をきたしてもおかしくはないだろうに。黒雨病くうびょうの浸食を乗り切れたことから実証済みではあったが、彼女の精神は、そこらの大人が顔負けする程度には強靱なものらしい。

それに、もう一つ気になったことがある。彼女の話し方が、カティにいたく馴染み深いものになったことだ。初めは見た目相応の幼

いしゃべり方をしていたが、今は口調が変わっている。

彼女が今話していたのは王国言語<sup>キングス</sup>。貴族言葉や紳士、淑女言葉などと呼ばれたりもする、都市<sup>ロンドン</sup>の上層部に住む人間が使う言葉だ。無教養な人間がおいそれと話せる言葉遣いではない。

気になる。気にはなったが、とりあえず今は空気を変えるのが先だった。極力彼女の情緒を安定させておきたい。

「とりあえず、水飲め。水」

こくりとうなずき、今度こそ水筒を受け取る少女。両手でこくりと水を飲む。

彼女が一息吐いたのを見計らって、会話を再開することにする。

「……俺はカティって言うんだけど。お前、名前なんて言うの？」

「……リュヌ、っていう」

(……お、またガキみたいなしゃべり方に戻った?)

何か法則性があるのか。しかし、とりあえず脇に置いておく。

「いい名前じゃねえか」

「うん。おばあちゃんがつけてくれた」

おそらくその祖母がフランス人だと気づく。

王国言語に、このご時世に国際結婚をする家系、それに名前の由来、これらから、恐らくリュヌはいいとこの嬢ちゃんと言うことで間違いないだろうとカティは予想した。

しかしなぜ、こんなところでそのご令嬢がひとり放置されていたのか。カティには見当も付かない。

(ま、聞くのは後回し後回し、と)

「リュヌ、腹減ったか？」

「え……うん。ぺこぺこ」

そりゃあそうだろう。わかってて聞いたのだ。カティはさっき少女が寝ていた場所に置きっぱなしの固パンと水筒、それにバックパツクを取ってくる。そしてパンを少女に渡してみた。

「それ食ってみ」

初めてこのような安物のパンを見るのだろう。珍しげに回してみたり叩いたりした後で少女がパンを口にする、が。

「……固い」

「やっぱり無理か？」

そんな気はしていた。カティなら気にせず食べられるが軽石のように固いし、それを我慢しても、けして味がいいわけでもないのだ。

「しょうがねえか。ちょっとその水筒かして」

「……ん」

リュヌから水筒を受け取り、自分の持っている水筒から中身を移す。ちょうど片方が空っぽになったあんばいだ。そしてカティはナイフを取り出すと、力を込めてギコギコと空の水筒を切り始めた。

「……いいの？ 壊しちゃって」

「ああ、いいよ。水筒は合計五つあるからな。それに、一つぐらいはこうしておいた方が、後々便利だろうさ」

そうして切り分け、小さな椀のようになった水筒に水と固パン、ナイフで削ったチーズとニシンを入れる。ついでに少しだけ、ロイスからふんだくった棒砂糖を削って入れた。

幻燈器の上蓋を外し、魚尾噴出からバーナー噴出に変わった蒼い炎に丸ごと乗せる。水筒はブリキ製なのでそのまま火にかけられるのだ。鍋が見つからなかったから、これからはこの半径二インチ程度の小さな鍋で代用することになるだろう。

チーズと一緒にくすねてきたバターナイフのようなものでかき混ぜていると、火が通ってどろどろになってきた。ニシンの塩分もあるし、そこそこ食べられる味だろう。

ハンケチーフで掴んで火から下ろす。熱くないようハンケチーフで包み、リュウに渡す。

「ほら、食べ。熱いから冷ましながら食べよ」

リュウはきょとんとした。小鍋とカティの顔を交互に見て、小首を傾げる。

「カティの分は？」

「俺は固いまままで食べるからいいんだよ。いいから食べ」

押しつけると、慌てたように受け取った。

「……ありがとう」

「ああ。あ、あと容器の端で手とか口切るなよ」

「うん」

幻燈器に蓋をかぶせる。再び炎が魚尾噴出に戻り、室内が少し明るくなった。

バターナイフもどきで粥のようなものを掬っては口に運ぶリュヌ。調理したとは言えるくなくないはずなのだが、空腹が押しつけてもくもくと食べ続けている。尻尾がゆらゆらと揺れているのは、犬猫と同じで機嫌のいい証なのだろうか。

「おいしかった。ごちそうさまでした」

固パンやチーズをがりがりと嚙りつつそんなことを考えていたカティは、手を止める。

「ああ、もういいのか」

「うん。大丈夫。元からあんまり食べられないから」

「そうか」

そしてまた会話が途切れる。

カティがパンをかじる音と、ガスの燃烧臭だけが室内に漂う。

込み入ったことを話すのは、リュヌのことも考えて明日にすることに決めた。しかし、そうすると何も話題が無くて困った。

ロイスならこういう状況も平気で乗り切れるだろう。彼は気安い性質だし、女性に対してはそれに輪をかける。だがカティは全くの逆なのだ。まず初対面の人間には愛想が悪いし、女性に対してはそれに輪をかける。今までは自分はそれでいいと思っていたが、カティは初めてそんな自身の性質を後悔することになった。

眉間にしわを寄せてそんなことを考えていると、傍らのリュウが口を開いた。

「あのね」

「……ん、なんだ？」

リュウは手慰みに両手のかぎ爪をかちかちと合わせたりしながらぼつぼつしゃべる。

「気を失ってたとき、なんかいろんなことが頭の中に入ってきてわけがわからなくなってたの。まわりのおいがいつペンに入ってきてぐちゃぐちゃになったり、頭のとっぺんが引っ張られるような感じになったり」

（……そうだろうとは思ってたけど、やっぱり新しい感覚器官が備わってるか）

リュウは幻燈を見ながら、なおも言い募る。

「それでね、なんどもなんどもそうなって、頭が割れそうになってもうダメ、もう我慢できない、誰か助けてってなったときにね、急にふわっと体が温かくなつたの」遊ばせていた両手を合わせるリュウ。目が煌めいているのは、幻燈器の光によるものか。「で、その後、「大丈夫だ」って。そしたら私の体もちよっと温かくなって、ああ、大丈夫なんだ。私はまだ大丈夫なんだ、って」

（う……それは……）

「あんまり覚えてないんだけど、あれ、カティなんだよね？」

そこでカティに目を向けてきた。翡翠の瞳が揺れている。

「あ、ああ。まあ、そんな感じ。……ロイスって言って、俺の友達

も一緒にいたけどさ！」

「そうなんだ。でも、今までのが全部カティだったってのは、わかったよ？ みんな、さっきとおんなじ温かさだったもん」

さっきというのは、ここに着いてからの最後の発作のことだろう。

自分のやった事を改めて確認されるのがきまり悪く感じてしまい、カティは目を逸らす。

「ありがとう、カティ」

リュヌの顔に笑みが乗る。蒼い灯りに照らされた笑顔はブルーベルの花を思わせるかわいらしいものだった。自然、カティの顔が火照る。

「ぐむ……うん。まあ、よかったな、助かって」

「うん」

再び場に静寂が戻る。

カティの食事音が無くなったぶん、さっきよりも静かだ。

だがカティは、さっきよりは居心地の悪さを感じてはいなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5106y/>

---

霧の中を這う者たち

2011年11月22日02時00分発行